サムエル記第一7章1－4節 「実を結ぶ準備」

1A 自分たちの間にある偶像

1B 神の箱を移した失敗

2B 神の箱の中を見た民

3B 二十年間の月日

4B 主の助け

2A 主の収穫

1B 結ばれる実

2B 用意の時期

本文

明けまして、おめでとうございます。私たちは、あまり去年に神が与えられたことの恵みを思い返すことなく、年を越してしまいましたが、主は豊かに恵んでくださいました。それは何よりも、愛する兄弟姉妹を加えて与えてくださったことです。H さん、R さん、Y さん、Y さん、N さんも信仰を持ちました。それから、A さんもバプテスマを受けることを決め、五人がバプテスマを七月に受けました。それから、H が八月のキャンプでバプテスマを受けて、九月には R さんが受けました。そして E さんが信仰を持ち、そして M さんも信仰がはっきりしていきています。このように神は救われる人を加えてくださいましたが、すでに信じている人々も加えてくださいました。Hさん、Hご夫婦、Kさん、K ご夫婦、S さん、そして A さん、Y さんなど、主がこの教会に呼び入れてくださいました。これは、人数が増えたということが嬉しいのではなく、その加えてくださった兄弟姉妹を、兄弟姉妹と呼ぶことのできる愛の結びつきを与えてくださったことが嬉しいのです。ですから、こうやって正月を共に主にあって祝える、神の家族が生まれたことは、完全に神の御霊の働きです。

そして、私たち明石の宣教旅行を祈りで支えてくださって感謝します。去年は、三月と七月に行くことができました。今年、二月に宣教地から私たちの愛する姉妹が訪ねて来てくれます。楽しみですね。そして五月にはカンファレンス、八月にはキャンプ、そして十一月に合同修養会が大きな出来事としてありました。そして 9 月から月に一回、ここ品川でも家庭集会が始まっています。上野公園や駅前での路傍伝道も始めました。イースターや、クリスマスもありましたが、何よりも、何よりも、毎週、日曜日に主への礼拝を共にすることのできたその喜びは何にも代えがたいものです。

今年 2015 年も、主にあって期待したいです。「新年の抱負」というものを、私たちは年始めに考えます。「新年の抱負」と言えば、一般の人々ではどのようなものでしょうか。こんなのがありました、男性は、「1 位 仕事を頑張る 30.4% 2 位 お金をためる 22.0% 3 位 プライベートを充実させる 12.0% 4 位 彼氏・彼女を作る 8.4% 5 位 ダイエットする 4.1%」女性は次の通りです。「1 位 お金をためる 18.8% 2 位 プライベートを充実させる 18.2% 3 位 仕事を頑張る 13.8%

4 位 ダイエットする 12.0% 5 位 結婚する 7.2%」私たちキリスト者は、主にあって、御心にかなった抱負を考えてみたいと思います。結論から言いますと、「霊的成長への不断の努力」ということでしょう。お読みしたい聖書箇所は、初めにサムエル記第一7章 1-4 節です。

7:1 キルヤテ・エアリムの人々は来て、主の箱を運び上げ、それを丘の上のアビナダブの家に運び、彼の子エルアザルを聖別して、主の箱を守らせた。7:2 その箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は主を慕い求めていた。7:3 そのころ、サムエルはイスラエルの全家に次のように言った。「もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。」7:4 そこでイスラエル人は、バアルやアシュタロテを取り除き、主にのみ仕えた。

1A 自分たちの間にある偶像

時は、紀元前十世紀の時です。イスラエルは、士師の時代、約三百年の間、自分にとって、自分の目に正しいことをめいめいが行っている時代を過ごしました。主ご自身ではなく、自分で正しいと思っていることを行っていたので、「主」という神の名は呼んでいますが、していることはまるで滅茶苦茶でした。周囲の住民の拝んでいる神々を自分たちも拝み始め、それでその周囲の敵から虐げられる日々が続いていました。

その中で、一人の士師、霊的指導者が育っていました。サムエルという子です。幼少の時から祭司に育てられていましたが、その間もイスラエルの霊的混乱ぶりは酷いものでした。祭司の二人の息子は、主に捧げるいけにえを奪い取り、幕屋に仕える女と寝ていました。そこで主は裁きを行なわれます。ペリシテ人がイスラエルに攻め入ってきました。イスラエル人は戦いましたが、四千人もの兵士が打たれました。それで、「なぜ主は、私たちを打たれたのだろう。そうだ、シロにある主の契約の箱を陣地に持っていこう。そうすれば、それが我々の真ん中に来て、我々を敵の手から救い出してくださる。」と言ったのです。神の箱を持って来れば、その箱がお守りのように私たちを守って、救い出してくださると思いました。

ところが、ペリシテ人は、初めは怖じ気ましたが、奮い立って戦いました。するとことごとくイスラエル人が倒れて、なんと神の箱までを奪い取ったのです。そして祭司の息子二人も死に、祭司エリ自身も倒れて死んでしまいました。息子の一人ピネハスの妻は、子を産むときに死んでしまいましたが、その子に「イ・カボテ」、神の栄光が去っていったと言って死にました。

しかし、神はその箱によって、ご自身が生きていることをペリシテ人の間で示されます。ペリシテ人は、自分たちの神、ダゴンという魚の神の宮に、その箱を安置しました。ところが、ダゴンはその頭がもげて倒れており、それ以降、神の箱のある町で神は人々を腫物で打たれたとあります（かなり重症な痔であると考えられています）。それでペリシテ人の町を転々としましたが、ついに、こ

れをイスラエル人に戻そうということになりました。

牛車の上に箱を載せて、牛に牽かせて牛が進むに任せていたら、ペリシテ人とイスラエル人との境にある町、ベテ・シェメシュに行きました。ベテ・シェメシュの人たちは非常に喜び、主に対していけにえを捧げました。ところが、なんとそこで民が、五万人ぐらいが死んでしまったのです。それは、神の箱の上にある贖いの蓋を開けて、中を見てしまったからです。主は、神の箱は触ってもいけないように厳に戒められていたのに、中を覗いてしまいした。悲劇でしかありませんが、彼らの霊的判断力が養われていなかったのです。

そこで、彼らは主の箱を、祭司の家であるアブナダブの家に移して、祭司エルアザルにこれを管理させました。それが何と、二十年も続きます。そしてついに、イスラエルの全ての人たちが主を慕い求めてきたとあります。霊的混乱から、主に目を向けるまでこれだけの月日が経ち、それまでは、自分たちの目に正しいことをしていたので右往左往していました。

1B　神の箱を移した失敗

私たちが、新年の抱負、新たな決意を考える時に、この話から多くの教訓を学ぶことができます。一つは、「自分の良かれと思う方法で動かない」ということです。イスラエルの人たちが、ペリシテ人がやってきて、それで倒れてしまいました。そこで彼らは、神の箱さえその真ん中に持っていけば主は勝利をもたらしてくださると思っていました。しかし、「神の箱を動かす」という発想自体が、他の異教の神々への考え方の影響を受けていたのです。神は箱を通してご自身の聖なることを示されますが、箱の中に神がおられるのではないのです。けれども、その異教的な影響を受けながら、主なる神を考えていました。ローマ 12 章 2 節には、「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。思いの一新をしておらず、この世と調子を合わせたままの状態で動いてしまっているのです。彼ら自身は、それで主をあがめていると思っていたかもしれません。なんせ、「*神の箱*」を動かすのですから。けれども、異教の神々を拝んでいるのと何ら変わっていなかったのです。

私たちは、自分の霊的状況あるいは周りの霊的状態が良くないと判断すると、拙速に「これこれをすれば、状況は良くなるに違いない。」と考えて、それを行おうとしてしまいます。この考え方、「これこれをすれば、うまくいく」という考え自体が信仰ではなく、肉の働きです。信仰は、自分を捨てて、自分をへりくだらせて、ひたすら主を待ち望む中で、主が私たちの心を動かしてくださるところから始まります。「ガラテヤ 3:3 あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」イエス様を信じる時は、私たちがこれまで成し遂げた業績は全く数えられません。むしろ、自分がこれまで犯した罪という負債を認めなければいけないのです。そして、もっぱら、神がご自分の御子によって成し遂げてくださったことを見上げて、それで信じるのです。信じてからも同じように、御霊によって進むのです。

2B　神の箱の中を見た民

そして、もう一つの教訓となる戒めは、「神の領域に立ち入らない」ということです。イスラエル人は、神の箱の中を見てしまい、それで死んでしまいました。私たちはしばしば、この過ちを犯します。「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。（箴言 3:5）」自分の悟りに頼るな、と命じられているのに、頼ってしまう過ちを犯します。

一つは、人や状況を裁くことでしょう。イエス様は、「さばいてはいけません。さばかれないためです。」と言われました。すべてを知り、すべてに知恵を持っておられる方は神のみであります。そして正しい方は唯一、神だけです。聖書は徹底的に、神だけが正しい方であり、私たちはそうではないことを教えています。ノアは正しい人と呼ばれましたが、泥酔して全裸になって寝ていたことが書かれています。ダビデは神に愛された人でしたが、姦淫の罪と殺人の罪を犯しました。神が教えておられるのは、「わたしだけが義である。あなたがたは、ただわたしの憐れみによってのみ生き、わたしの恵みによってのみ正しいとみなされるのだ。」ということを教えています。ですから、私たちのすることは、神に信頼することです。神の恵みに欲することです。神に判断も任せることです。神に判断を任せる人は祈りが多くなります。人のために執り成しの祈りを捧げることができます。自分で判断するのではなく、神に祈り求め、神が動いてくださることを求めます。

私たちのもう一つの過ちは、落胆し、失望することです。落胆するというのは、今、見える状況の中でもうこれはだめだと決めつけて、見えていないことまで見えているかのように判断しているからです。神はしかし、私たちに良い計画を持っておられます。神は善なる方であり、善い意図で行っていないことは何一つありません。「わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。（詩篇 42:5）」

ですから、裁くことも、これから先のことも、すべて神の領域なのです。そこは聖なる領域であり、私たちの立ち入る場所ではないのです。私たちのすることは、熱心な祈りであり、人や周りの状況、あるいは将来のことではなく、神に目を向けるのです。

3B　二十年間の月日

そして大事なのは、月日が二十年経っていたということです。主が働いてくださるために、まず必要だったのは、彼らの心が整えられることでした。サムエルは、「あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き」と言っています。これまで、イスラエル人は外側にあるものによって、問題を解決しようとしました。神の箱を動かしさえすれば、主が救ってくださると思っていました。そして、ペリシテ人の神々に対抗できると思っていました。けれども問題は、ペリシテ人の神々のような偶像は外にあるのではなく、まさしく自分たちの間にあったのです。自分たちの心や思いの中に偶像があったのです。それに気づくのに、二十年を費やしたのです。

私たちに必要なのは、ですから用意することです。キリスト者として、心にある不純物を取り除いていただくよう神に願う、その不断の努力です。何かをすることではなく、キリストの中に留まって、その恵みによって成長することです。「2ペテロ 3:18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」これは、一夜で変わるものではなく、少しずつ変わっていくものです。子供の身丈が伸びるように、少しずつ成長します。イエス・キリストの恵みと知識において、私は成長するのだという抱負を掲げるなら、これこそ神に喜ばれる新年の抱負になります。

「心を主に向け、主にのみ仕えるなら」とサムエルは言っています。イスラエル人は、主に仕えていなかったのではありません。主に仕えていたのです。けれども、他の神々にも仕えていました。まことの主なる神に仕えているのですが、そして自分の欲していること、自分の感じていること、自分の思っていることも、神の御言葉の光の前に持ってくるのではなく、勝手に行っていたのです。こうした二心が問題でした。したがって、私たちは心を清めていただかなればいけません。

次から言う喩えは、ちょっと汚くなってしまうので、不快にさせてしまったら申し訳ありません。ある牧師が私や少数の牧師に打ち明けて、こんな例が罪を説明するのに分かり易いと言いました。「*罪はおならのようだ。*」ということです。つまり、おならはもちろん臭いです。けれども、自分一人の時は平気でおならをします。同じように私たちは罪を犯す時に、誰も見ていなければ、自分一人の時は容易く犯しやすいのです。けれども、人が近くにいて、おならをしてしまったらどうでしょうか？ごまかしますね。上手にごまかして、何事もなかったかのようにふるまいます。同じように、人に自分の罪が知られそうになると、それがあたかも何でもないかのように誤魔化したり、正当化したりします。それから、おならは自分のは大して臭いと思いませんが、他人のは、非常に臭いです。同じように、罪は自分の犯すものはそれほど醜いと思いませんが、他人の罪はとても不快です。このように、私たちの敵は外側にあるのではなく、内側にあります。自分の内にある罪、自分の生活にある罪を取り除くこと、これが成長のための鍵です。

4B　主の助け

このような地道な霊的成長の営みを経て、私たちは霊的勝利を体験できます。5 節から 12 節までざっと読んでみましょう。

7:5 それで、サムエルは言った。「イスラエル人をみな、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために主に祈りましょう。」7:6 彼らはミツパに集まり、水を汲んで主の前に注ぎ、その日は断食した。そうして、その所で言った。「私たちは主に対して罪を犯しました。」こうしてサムエルはミツパでイスラエル人をさばいた。7:7 イスラエル人がミツパに集まったことをペリシテ人が聞いたとき、ペリシテ人の領主たちはイスラエルに攻め上った。イスラエル人はこれを聞いて、ペリシテ人を恐れた。7:8 そこでイスラエル人はサムエルに言った。「私たちの神、主に叫ぶのをやめないでください。私たちをペリシテ人の手から救ってくださるように。」7:9 サムエルは乳離れしていない子羊一頭を取り、焼き尽くす全焼のいけにえとして主にささげた。サムエルはイスラエルのために主に叫ん

だ。それで主は彼に答えられた。7:10 サムエルが全焼のいけにえをささげていたとき、ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして近づいて来たが、主はその日、ペリシテ人の上に、大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエル人に打ち負かされた。7:11 イスラエルの人々は、ミツパから出て、ペリシテ人を追い、彼らを打って、ベテ・カルの下にまで行った。7:12 そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった。」と言った。

いかがでしょうか、二十年後もペリシテ人が自分たちを襲ってきました。その間、彼らはずっとペリシテ人の圧政の中にいて苦しめられていました。二十年前に気づいた問題があって、それを克服しようとしたけれども失敗しました。そして二十年後にまた克服する機会がやってきた時に、私たちは克服できるでしょうか？ここの話に従えば、できると言えます。彼らは、自分たちが主に罪を犯したことを気づきました。私たちの主イエス様の名前の意味は、「主は救い」です。私たちを罪から救ってくださる方です。私たちを罪の罰から救ってくださるだけでなく、罪の力から救ってくださいます。自分自身に取り組む必要がありますが、そこで出くわす自分の罪を、イエス様は取り除く業を行ってくださいます。

けれども今度は、神の箱を動かすという行動、パフォーマンスではなくて、主との正しい関係の中にある、みなぎる力がここに書かれています。主のみを仰ぎ見ている時に、ただ主に対して祈ることに専念している時に、主ご自身が敵に打ち勝たせてくださいます。すばらしいですね、このような祈りを私たちが捧げていきたいですね。そして確かに、エベン・エゼルすなわち、主がここまで助けてくださったということを経験していきたいです。

2A 主の収穫

1B 結ばれる実

今年は、このような実質的な実を結ばせる年になるような決意をしていきたいです。私たちは年末に、イエス様が再び戻って来られることについて思いを巡らしました。イエス様が戻ってこられる時に行われるのは、収穫です。畑には、種が蒔かれて実を結びます。悪い種も敵であるサタンが蒔いて、悪い麦も出てきます。主が戻ってこられる時は、悪い麦は刈り取られて燃える火の炉の中に投げ込まれますが、けれども良い実は同じように刈り取られ、倉に入れられます。イエス様は、「正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。（マタイ 13:43）」と言われました。私たちが結ばせるその実、罪を取り除き、御霊によって成長するその実を期待して、イエス様は戻ってこられるのです。その清算の時に備えるために、私たちは霊的成長に献身します。

2B 用意の時期

ですから、私たちはイエス様の刈り取りのために、せっせと実を結ばせる用意をしていきましょう。「蟻は力のない種族だが、夏のうちに食糧を確保する。（箴言 30:24）」そのまま、自分のうちにある偶像や罪をほおっておいて、クリスチャンの表向きの活動をしても、それは余計なものとして刈

り取られてしまいます。今、目の前にあるいろいろな活動に目を留めるのではなく、自分自身にある課題に地道に取り組む時、主が戻ってこられる時に、確実に、私たちは恥ずかしくない姿でこの方の前に出ることで来ます。蟻のように、今のうちに用意して主の来臨に備えるのです。

そして、まだイエス様を自分の主として受け入れておられない方は、新年の抱負、しなければいけない用意は、この方を自分の救い主、主として心にお迎えすることです。この方はこの地上を裁かれるために来られます。そして、罪あるままで死ねば、死んで神の裁きを受けます。しかし、神はひとりも滅びることを望んでおられません。愛しておられます。ご自身の独り子を死に渡され、身代わりに罪を負わせるほどに、愛しておられます。ここまでの犠牲、究極の犠牲を払ってくださった神に、自分の罪を言い表し、悔い改め、神のために生きること、イエスを主として生きることを告白するならば、最善の用意をすることができます。裁きではなく、神は救い、ご自分の国に招き入れてくださるのです。